

景教經典序聽迷詩所經に就いて

一 緒 言

序聽迷詩所經一卷と題した殘卷一軸を東京帝國大學の高楠教授から示されその解説を求められたのは、昨年秋も末近き頃であつた。此の殘卷は例の敦煌の佛洞から出て支那の某氏の所有に歸し、轉じて近く同教授の手に入つたもので、内容を一見すれば景教經典の残りなることは明かであるが、何人も從來之についての解説研究を公にしたものは無いとのことである。爾來研究を重ねて見たものゝ自分の見る所では此の經典は非常に難解のものであつて、恐らく何人を以てしても、明かに之を讀解することは不可能のことゝ思ふ。今敢て此の一篇を草するのは、もとよりその研究を完了したが故では無く、たゞ僅に委囑の責を塞ぐ爲と、一つには敦煌出土の文獻との間には、少からぬ關係を有せらるゝ内藤教授の還曆祝賀に當つて、そこから出た類の少い景教の遺文を世に傳へることは、其の間多少の因縁を有しなくてもないと思ふが爲である。

二 體 裁

此の殘卷は敦煌出土の佛典に極めて普通なる厚手の黃紙、豎約二七センチメートル、八(約八寸七分)の卷子本で、細